

ペンネーム	あっちゃん
-------	-------

【エピソードのタイトル】

父の見ていた光景

【エピソードの内容】

今年になって、父は仕事を引退した。母いわく、毎日家でごそごそしている…のだそうだ。

ランナーの父はいつも楽しそうで輝いていた。フルマラソンはもちろん、100km以上の距離を走破するウルトラマラソンやクロスカントリーなど、国内あちこちの大会に出場し、景品の T シャツをしょっちゅう私に送りつけてきた。そんな父とマラソンの事を話している時に、私がうっかり発した一言、「いつか一緒に走ろう。」この言葉を父はとても楽しみにしていた。

第3回下関海響マラソンで、私は父との約束を果たすことができた。とはいえ、その約1年前に脳梗塞で倒れた父は、後遺症はほとんど残らなかったものの、私との約束を果たす為に、かなり無理をして大会に臨んだのだと思う。父はマラソン経験の少ない私を…、私は父の体調を…、互いに気遣いすぎて、共に大きくペースを乱した。二人とも完走はしたものの、燦燦たる結果に。これを最後のマラソンと決めていたのだろう、その後、父は走ることをやめてしまった。私もその後、走ることはなかった。

あれから約5年、今の父は「燃え尽き症候群」とでもいうのだろうか。私はふと、昔の「輝いていた父」が見ていた光景を、もう一度見てみたくなった。第8回海響マラソンにエントリーし、幸いにも抽選で当選した。しかし、準備(トレーニング)は全く進まなかった。風邪をひき、ぶり返し…、趣味のフットサルで肉離れ…、子供行事…。ほとんど練習できないまま、大会当日を迎えることとなる。

タイムは二の次で、とにかく完走する事だけを目標にマラソンをスタート。案の定、レースは相当に苦しいものとなった。スタート直後にトイレにかけこむ事態に。レースに復帰すると、帽子にピンク色の風船をつけた6時間のペースランナーは遙か先を走っていた。笑うしかない…。そんな私だったが、ボランティアや沿道の方々は皆、声援を送ってくださり、それがとてもあたたかく、嬉しかった。声援に後押しされ、約30km地点までには、関門閉鎖まで約10分の貯金をためることができていた。

しかしここから、練習不足のランナーに疲労は容赦なく襲いかかる。足が重く、走り続けることができない。ペースは大幅に落ち、10分の貯金はどんどんなくなっていく。6時間のペースランナーに、いつ追いつかれ、抜かれるか…。後ろを度々振り返りながら、きつい登りは歩いて体力を温存し、下りと平地はゆっくりと走り続ける様に意識した。「最終関門閉鎖まで約6分、まだ間に合うよっ!!」そんな声を聞いた様な気がする。

海峡メッセ裏の沿道で、先にゴールした友人二人が叫んでいた。「A さん(私のこと)、まだギリ間に合うよっ!!」足はあまり前には出ないが走れている。このまま何とかゴールまで…。不思議と足が軽くなった様な気がした。ゴールゲートが見えてきた。今できる、一番の笑顔でゴールしよう…。そう思った瞬間、何故だか涙がこみ上げてきた。(恥ずかしいので必死にこらえた。)一瞬、どんなポーズでゲートをくぐろうか考えたが、考えがまとまる前にゲートに到達してしまった。自然と両手を上げていた。

自身4回目のマラソンでタイムはワースト(5時間57分台)。でも、何とかゴールまでたどり着いた達成感は、初

マラソンゴール時のそれに匹敵するものだった。「父さん、何とか完走できたよっ！！」父がマラソンに求めている物がこの達成感だったのかどうかはわからない。でも父は、何度もこのスタートからゴールまでの時間を楽しんでいたのだと思う。この度のマラソン(第8回海響マラソン)は、私がマラソンに関して忘れていた様々な事を思い出させてくれた。この経験が今後、父と私が「父が再び輝ける何か」を見つけるヒントとなってくれる事を心から願っている。